

二〇一四年度
入学試験

国語

一回（二月一日） 富士見中学校

注意事項

- (1) 問題は1ページから18ページまであります。
- (2) 問題にページ不足や印刷の良くないところがあれば、すぐに手をあげて、かんとく監督の先生に伝えてください。
- (3) 解答はすべて解答用紙の定められた場所に、指示通りに記入してください。
- (4) 句読点等は字数に数えて解答してください。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(問題文には一部省略したところがあり、**1**～**10**は段落番号を示します。)

1 街角で見かける大型スクリーン、いわゆる街頭ビジョンが新宿駅東口に現れたのは、一九八〇年代のはじめだった。[※]アルタの名で通っているビルの壁面に映し出される映像は、当初白熱電球によるものだったが、それでも東口駅前に群衆が絶えなかったのは、万博などの催し以外で**A**に設置された最初の例のひとつだったからだろう。

2 それから三〇年近く経過した現在、わたしたちの都市にはさらに大型のスクリーンが氾濫することになった。[※]「a」マンハッタンのタイムズスクエア周辺のビルは、その壁面のほとんどがスクリーンと化している。そこではケーブルテレビ局が建物全体を覆う曲面スクリーンに四六時中ニュースを流しており、広場の反対側では同じように広告が流されている。これだけの大きさになると建物に画面が取り付けられているというより、画面の一部が建物になっていると言ったほうが近いかもしれない。

3 現在は孤立している映像建築が相互につながることによって、遠く離れた建築同士が映像を交換したり、「b」共有することが可能になる。**I**に視点を置けば、それはひとつの巨大映像装置すなわち「ピクチャープラネット」に見えるだろう。広場の群衆を照らすのは、手元の携帯と映像建築の眩しい**II**である。

4 ここで時代を二世紀ばかりさかのぼってみよう。ヨーロッパで写真が発明されたのは一九世紀の前半だが、

その発明直後から複製メディアとして大きな成功を収めたのは、まさしくそれが大衆社会の到来に重なっていたからである。それ以来レンズは多くの人間の集団を写してきた。人間は生まれてから死ぬまで、その人生のフシメごとに写真に撮られてきた。家族写真にはじまり、学校や会社、あるいは村や町などの祭りや年中行事には必ず記念写真が付き物であり、集団はカメラによって記録されてきた。

5 時代が動くとき、それはしばしば大きな群衆現象を伴う。一九八九年の秋から冬にかけて、旧ソ連と東ヨーロッパで起きた一連の革命は、日増しに大きくなるデモや集会が雪崩のようにして、当時の政権を倒していった。わたし自身それらのデモや集会、あるいはその後続く内戦などを見つめてきたが、二一世紀も最初の一〇年を過ぎようとするいま、時代を動かしてゆく群衆のあり方が、すこし変わってきているようにみえる。その変化は当然、社会の変化と連携しているはずである。

6 [※]マスメディアの役割自体にそれほどの変化はないが、個人の側から見ると、わたしたちが現在手にしている新しい種類のメディアには驚くべきものがある。言うまでもなく、小型の情報通信端末と、それに向けたさまざまなサービスである。メディアの小型化と複合化とともに、情報の配信技術もコード化し、映像や音楽をいつでもどこでも受信するだけでなく、個人がさまざまな情報を配信することも**B**な活動となっている。

7 [※]モバイルという言葉が端的に示しているように、受信と発信の核となる移動型のパーソナルメディアが**C**に拡大している。「c」超小型化したコンピューターが、人間社会のいたるところに入り込み、いまやわたしたちは朝目覚めてから夜寝るまで、いや寝ているあいだでさえ、コンピューターの存在から逃れることはできない。

8 そのことがもたらす効率や安全の旗印と引き換えに、わたしたちが非常に厳しい管理と監視の社会に生きなければならぬことも、なかば事実である。情報管理が行き届いた現在³は、二〇世紀の群衆がマスメディアと取り持っていた関係とは、質的に違う状態へ入りつつあることは、誰もが肌で感じていることではないだろうか。そしてこのことが今日の群衆に、新たな性格を与え始めているように思える。それは互いに関係している、ふたつの III によって特徴づけられる。

9 そのひとつは、擬似群衆の増大と呼ぶことができるだろう。インターネット上に形成されている、さまざまなコミュニティを想像すると分かりやすいかもしれない。[※]Twitterのように言葉を介している場合もあれば、オンラインゲームのようにアクションの共有によって形成されている群衆もある。こうした、実空間では互いに隔離されているのに、情報空間では互いに影響を与えられる具体的な関係をもっている擬似的な群衆が、実在の群衆を凌駕してしまうという現実である。これはお茶の間でテレビの前に座っているあいだに形成されている、視聴者という名の群衆とは明らかにコトなる性格のものだ。それは物理的な建築を必要としない、新しい都市であり、IV とも言える空間である。わたしたちが生きる都市とは、この空間と絶え間のないイメージ交換によって成立している。

10 もうひとつは、非決定性の増大と仮に呼ぶことができるだろう。かつてなかったほどの多くの情報チャンネルをもった個人は、意思の決定を先延ばしにする傾向がある。それは必ずしも、待ち合わせの場所をあらかじめ決めないというような、単なる習慣の変化ではない。残されている時間があるかぎり、より多くの情報を手につつ、最後の瞬間まで心を決めない。決定しない群衆が、購買から投票までさまざまなキョクメンにおいて、

影響を増してゆくのではないか。たとえば選挙にかんするアンケートで「分からない」と回答する比率が多いとき、必ずしもそれは積極的な意見を表しているのではないのかもしれない。それこそが擬似群衆に特有の態度であるかもしれない。

(港千尋『書物の変』より)

※ アルタ……新宿駅東口前にあるファッションビル。

※ 万博……万国博覧会の略称。

※ マンハッタンのタイムズスクエア……アメリカ合衆国ニューヨーク市のマンハッタン島にある繁華街・交差点の名称。

※ メディア……情報の記録・伝達・保管などに用いられる物や装置。

※ マスメディア……多数の受け手へ向けての情報伝達のための手段となるもの。たとえば、新聞・雑誌・テレビなど。

※ 情報通信端末……電話機。ここでは、携帯電話のこと。

※ モバイル……移動可能な。

※ パーソナル……個人用の。小型で手軽な。

※ 擬似……本物とよく似ていてまぎらわしいこと。

※ コミュニティ……共同体。

※ Twitter……短文を投稿できる情報サービスのこと。日本では「つぶやき」と意識され定着している。
 ※ 凌駕……他を追いぬいてその上に立つこと。

問1

A

C

にあてはまる語句として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア 一時的 イ 爆発的 ウ 日常的 エ 本格的 オ 根本的

問2

〈a〉

〈c〉

にあてはまる語句として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア たとえば イ あるいは ウ だから エ しかし オ その代わりに カ その一方で

問3

次の(A)・(B)の文はそれぞれ、

1

10

段落の最初にあった文です。どの段落にもどせばよいですか。

それぞれ段落番号で答えなさい。

(A) この変化の特徴のひとつは、メディアが家や家庭といった、特定の場所に固定されることから完全に解放された点にある。

(B) 仮にこれを「映像建築」と呼ぶならば、近い未来にはさらに驚くべきことが待っているだろう。

問4

I

IV

に入れるのに最も適切なものを、それぞれ次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

I

IV

ア 都市 ア どこにも場所をもたないが、あらゆる場所に存在している
 イ 海上 イ どこにも存在できないが、あらゆる情報を操作している
 ウ 宇宙 ウ どこにも移動できないが、他の人と快適さを味わっている
 エ 地図 エ どこにでも移動ができ、常に他の人とながっている

問5

II

にあてはまる語句を考えて、漢字一字で答えなさい。また、

III

にあてはまる語句を、

本文中から漢字二字でぬき出して答えなさい。

問6 — 1 「群衆現象」とありますが、同じく「群衆」を使った四字の熟語で「無責任に他人の言動に従ってしまふ状態」を表した語句に「群衆」があります。 にあてはまる語句を漢字二字で答えなさい。

問7 — 2 「社会の変化」とありますが、筆者は、この「変化」によってどのような問題が起きていると述べていますか。それを示す最も適切な一文を本文中からぬき出し、最初の五字を答えなさい。

問8 — 3 「二〇世紀の群衆がマスメディアと取り持っていた関係」とありますが、その「関係」を示す実例を一つ、本文中から探すとしたら何ですか。三字以上五字以内でぬき出して答えなさい。

問9 [9]・[10] 段落の中に、一カ所、意味が通じない熟語があります。それをどのように直すとよいですか、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 不在 イ 理想 ウ 減少 エ 独占 オ 消極

問10 — 4 について、筆者の考えによれば、次のア～エは、「新たな性格を与えられた今日の群衆」にあてはまりますか。あてはまるならば「1」、あてはまらないならば「2」と答えなさい。

- ア 見知らぬ者同士が巨大スクリーンに映し出されたサッカーの試合を応援している。
 イ 見知らぬ者同士が公園や広場で抗議デモや集会に参加している。
 ウ 見知らぬ者同士がインターネット上で情報のやりとりをしている。
 エ 見知らぬ者同士が大都会の街角で政治家の演説に聞きいつている。

問11 — a e のカタカナを漢字に直しなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「5xマイナス15マイナス……えっと、2xマイナス2だから――」

半分ひとことだからか、三田村くんの声はなにかにくるまれてるみたいで、ふわんと聞こえてくる。右手で頬づえをつく私の左側から。

窓から入りこんでくるやわらかな日ざしは三田村くんのノートの上でへ a へした光に変わり、私の目の奥を刺激する。昼休みにびったりな、そのチクチクに目を細めていると、まるで水底に沈んでいくような気分になつていく。ぬるい眠気がまぶたの裏をぺろりと舐める。

いけない。「仕事」中だ。

あわてて目を見開いて水色の罫線に焦点をあわせたら、非常に初歩的なミスを発見してしまった。

「まちがってる」

「えっ、どこ？」

「ここ」

左手をノートに伸ばし、人さし指の先でへ b へと叩くと、「どこ、どこ」とおなじリズムで声もどつてくる。三田村くんの声に悲愴感や緊張感がないのはいつものことで、今日の理科準備室の暖かさとはぜんぜん関係ないのだけれど、いつ聞いてもここにびったりな声だなと思ってしまう。

「マイナスかけるマイナスだから、ここはマイナス2xプ、ラ、ス、2」

「ああっ、そうだったーっ！」

やけに芝居がかった叫び声をあげ、三田村くんは十本の指を左右のこめかみにめりこませた。そこから「ムンクの叫び」に変化させるもんだから、目も鼻も口もおかしな形にゆがんでいく。それでもちつともブサイクに見えるところが三田村くんだ。

美形というのとはすこしちがう（むしろ角度によっては、ちょっとサル顔でもある）のだけれど、三田村くんはなにをやっても様になり、いやみにはならない、というところが、私にはちよつといやみだったりする。

「ムンクの叫び」から「考える人」的ポーズになって、三田村くんは小さく、ちえっ、と舌打ちした。

「やっぱさあ、オレと数学って相性悪いと思うわ」

それって相性の問題じゃない。というのは口にせず、頬づえをつくのをやめて三田村くんを見る。

「ミスをしないうって、いつも意識するしかないと思う」

「はい、はい。にしてもさ、綿森。ちよつと愛想なさすぎじゃね？」

愛想なんて求められた覚えはないです。

心の内で毒づいていると、三田村くんは「なあ、横山、おまえもそう思うだろ？」と窓のほうに首をひねった。それで、あ、横山くんもいたんだった、と思います。

「いや、思わないけど」

一月半ばにしてはへ c への日ざし。それを正面から浴びている横山くんの輪郭はとてもあいまいで、返ってきた声もおなじようにへ d へとしていた。

(中 略)

そもそも、私が三田村くんに数学を教える仕事に就いたのは、十二月に入ってすぐのことだった。

三者面談三日目のホウカ後。三田村くんからオフア^bーがあった。

「オレに数学を教えてくれないか」

本館校舎と特別教室棟をつなぐ渡り廊下に私を引っ張っていった三田村くんは、めずらしく真顔だった。

クラスメイトとへ e へ隔た^{へた}って生きてきた私とて、目立つ生徒のことくらいは一応知っている。三田村くんは笑顔が「素」と言われるくらい、いつだって笑いを振りまく存在で、女子にもかなり人気があるけれど、体育実技をのぞく成績のほうはへ f へで、でもそんなところがまた愛されていたりする。それが、私を知る三田村くんだった。

「オレ、行きたい高校があるんだ。そこ、公立だけど陸上部はけっこう有名でさ。でも、いまのオレの成績じゃ、ほとんど無理っぽい。だから、頼む。オレに数学を教えてくれ。な、頼むよ、綿森。とにかく数学をなんとかしなきゃ、話になんないんだ」

「なんで？」

ほんとうは「なんで、私に頼むの？」とたずねたかったのだけれど、学校で人と口を利くことに慣れていない私の声は、「なんで」のところですでによれてしまつて、あとがつづかなかった。

こういった、いざというときの対応のまずさが、「綿森さんって無愛想」とか「ちょっと怖くない？」という

風評²につながってしまうのだ、とわかっている。が、場数を踏めないのだから練習のしようがなく、成長は望むべくもない。

だけど、三田村くんは私のことばの足りなさを気にすることなく、私が求めていた答えをへ g へと口にした。

「綿森が、クラスでいちばん無駄なく、サクサク教えてくれそうだから」

その目があまりにまっすぐで、伝わってくるものがいっぱいありすぎて、気がついたら私はうなずいていた——という、ちよつとうそになる。いや、かなりうそだし、それじゃあ少女マンガだ。

私は自慢^{じまん}じゃないが、「ひとり好き」というIDしか持たない女子中学生だ。

もちろん好きで手に入れたわけではなく、いつの間にか——たぶん、休み時間になると机に頬づえをついて、つまらなそうな顔で窓の外をながめたりしているうちに、「ひとり好き」という部類に入れられていた。

もうすこし過去にさかのぼって語るなら、私は小さいときからほかの人より、すこしばかりマイペースだったのだと思う。

幼稚園^{ようちえん}のころは、空を流れる雲ばかり見えて、親や先生を心配させた。

小学生になると、レトロなつくりの学校に通っていたせいで、校舎のあちこちを見てまわること熱中してしまつた。

黒光りする階段の手すりや、見たことがないほど小さなタイルが敷き詰められた手洗い場。講堂の、色ガラスがはめこまれた天窓と、そこから射しこむカラフルな光。

そういったものを飽かずながめてすごした。

そんなある日、ふとまわりを見まわして、ひとりでトイレに行っているのは私だけじゃないか、と気づいた。クラスの多くの子が知っていた愛美ちゃんの誕生日を知らないのも、女子では私だけだった。

ひとりで好きなことに浸っているうちに、完璧にスタートを失敗していた。いわゆる小学校デビューをしきじっていたのだ。

学年が上がっても、クラス替えがあっても、なんとなく同級生に近づけない、という感覚は消えなかった。むしろ、からだが大きくなるにつれ、その感覚も強まっていった。それでも卒業式はやってきて、中学生になる日もやってきた。

きんきさんと、殺気立つまでにぎやかな一年B組の教室にはめこまれた日。すこしくらいわらわれても、どこかのグループにもぐりこもう、と心に決めた。中学校デビューを狙ったのだ。

ところが、中身とちがって外見が老成すぎていたせい、必死の形相で接近してしまったからか、磁石のS極とS極を近づけたときのような感^{かん}触^{しよく}でかわされま^まく^くることとなる。部活でもすれば、と思いついたのは一学期も終わ^わりかけのころで、そのころには「新入生ウエルカム」の空^く気^きなど、もうどこにもなかった。

こうして、中学校デビューをもしくじった私に与^{あた}えられたのが、「ひとり好き」だった。もう雲にも手洗い場にも、なんの興味もなかったというのに。

それでも、なんだかんだと学校行事をやりすごしているうちに、二年生の二学期もあと一か月、になっていた。ここまで来たら、もういいや、だ。

こうなってしまったのは、もしかしたら小さいころのマイペースはまったく関係なくて、単に引^ひつ^ひ込^こみ思^し案^{あん}だったからなのかもしれない。そのあたりをシ^しュ^ュウ^ウセ^セイ^イして、高校デビューこそしくじるまい。高校に行けば、N極のような友だちに出会えるかもしれないし。

なんてことをへ^へと、頬づえをついて遠い目をしながら考えるのも、かなり板についてしまっていた。

三田村くんが私に声をかけてきたのは、そんなときだった。

月、水、金の昼休み。

給食をなるべく早くすませて、理科準備室に集合。

勉強するのは数学。でも、テスト前はその限りではない。

とりあえず、契約期間は二年生のあいだ。

それが、十二月に私と三田村くんが交^かわした契約だった。

「でも悪いけど、勉強教えてもらっても、お礼に金とか払^はうのは無理。だから、コロッケで勘^{かん}弁^{べん}して。オレがいるときなら、うちのコロッケ、好きなだけ食^くっていいからさ。あ、もちろんメンチでもオーケーね」

そう言う^うと、三田村くんは両手をあわせて私を拝^はんだ。

「な、それでなんとか手^てを打^うって^てくれないか」

「うちのコロッケって？」

「あ、うち、肉屋なの。知らなかった？ えーっ、知^ちって^てく^くれ^れよ。駅のカイサツ出^でて、右に曲^まが^がつて^てちよ^ちっと行^いったとこにある『肉のミタムラ』って店。手づくりコロッケなんかも売^うって^てんだ。揚^あげ^げた^たてのキャベツメンチ

なんて絶品だぜ。汚い店だけど、モノはまちがいないからさ」
コロッケやメンチカツに惹かれたわけじゃない。

「内海は頭はよくても、他人のために自分の時間は使わないやつだろ。久野は、図書委員で昼休みはいいことが多いから頼めない。横山はいいやつだけど、ていねいすぎてイマイチヨウリヨウ悪そうだし、名越なんて怖くて声かけられないし。健二に頼むのは悔しい。ありえない。絶対に途中でケンカになる。それから——」

人選の経過を説明してくれる三田村くんを、私は茫然とみつめていた。

彼の分析は私でさえ、なるほど、と思うものだった。きつと、クラスのだれもが「そう、そう」と言うにちが
いなかった。たしかに、名越実可子なんてまったくもってありえない。

ということは——

さつき三田村くんが口にした「私を選んだ理由」は、だれもが納得するものだってことなのか。

。

なんだか、ちよつとよかった。

それだけの理由だった。私が三田村くんの申し出にうなずいたのは。

(香坂直『ストロベリー・ブルー』より)

※ ムンクの叫び……「ムンク」はノルウェーの画家で「叫び」はその代表作。

※ 考える人……オーギュスト・ロダンが制作したブロンズ像。

※ オファー……申し出。

※ ID……本人であることを証明できるもの。

ここでは「級友からの一方的な決めつけ」ほどの意味。

※ レトロ……古めかしい様子。

問1 || a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 空らんへ a へ h にあてはまる語句として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、

記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア	つらつら	イ	ぼんぼん	ウ	さつぱり	エ	ぽかぽか	オ	あつさり
カ	ぼんやり	キ	ぼつぼつ	ク	うつすら	ケ	どきどき	コ	きらきら

問3 〜1「毒づいて」・4「手を打って」の意味を後から選び、記号を答えなさい。

1「毒づいて」

4「手を打って」

ア 悪口を言って

ア 無理矢理ゆるして

イ ブツブツ言って

イ 気持ちをなだめて

ウ 大声で叫んで

ウ 取引きを成立させて

エ ひそひそつぶやいて

エ すぐに仲直りして

問4 〜2「風評」・3「空気」の本文中での意味をそれぞれ答えなさい。ただし、2「風評」は漢字二字

で、3「空気」は五字以内で答えなさい。

問5 —①「場数を踏めない」とありますが、私が「場数を踏めない」理由を四十字以内で説明しなさい。

問6 —②「私のことばの足りなさ」とありますが、その「足り」なかったことばを本文中からぬき出して

答えなさい。

問7 —③「『ひとり好き』というIDしか持たない女子中学生だ」とありますが、そうなってしまった理

由として考えられることを本文中から二つ、それぞれ五字程度でぬき出して答えなさい。

問8 —④「必死の形相で接近してしまった」とありますが、その理由を三十五字以上四十五字以内で説明

しなさい。

問9 —⑤「テスト前はその限りではない」とはどういう意味ですか。二十五字以内で説明しなさい。

問10 には、「私を選んだ理由」が入ります。本文中から二十字以

内でぬき出して答えなさい。

